月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.26



学園震撼の鬼嫁襲来!?
みんな集まれ！ファルコム学園

jdk バンドボーカル・コテカナの
コテ放題♥

ファルコム jdk バンド ドラマー・オカジの
人生半キャラずらし

今回はトールズ仕官学院の内部に潜入！
英雄伝説 閃の軌跡 潜入レポート

ファルコムニュース

Falcom FanArt Collection

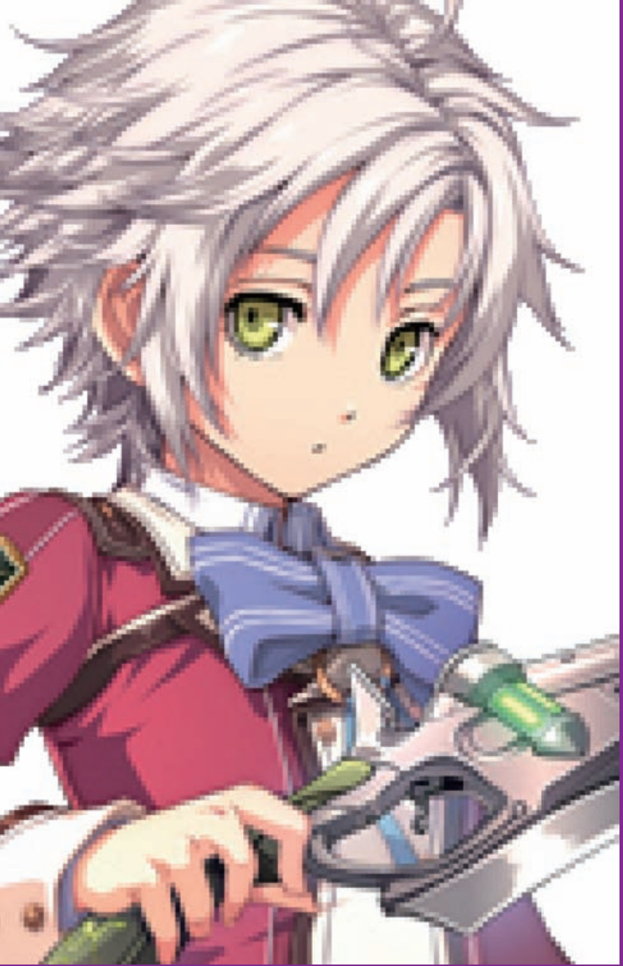
ナイアルは王都で紫髪の少女と出会う
英雄伝説 空の軌跡 リベール王国 スナップショット

ティオのファルコムラジオ めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏

騎士の魂は○○○○にあり!?

読み切り漫画
ザナドゥ ネクスト

浜田ぢゅんいち





FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

THE LEGEND OF HEROES
閃の軌跡
センノキセキ

リベール通信緊急号外
潜入レポート

リベール通信
帝国支部
アッシュ洋平
リベール通信帝国支部の新米記者。先輩のナイアル・バーンズにあこがれ、日々スクープを追う

さらなる新キャラクターが発覚！ トールズ士官学院の内部から、ゲームシステムまで、順調に制作が進む『閃の軌跡』の新着情報に直撃!!

『英雄伝説　閃の軌跡』
メーカー：日本ファルコム
ジャンル：ストーリーRPG
機種：PlayStation 3,PlayStation Vita
発売日：2013年発売予定
価格：価格未定





プール



家庭科室



美術室



修練場

トールズ士官学院の内部に突入!!

学院の関連キャラが続々！ VII組の日常に接近する!!

トールズ士官学院の内部に入ることに成功した！ 美術室や家庭科室、修練場など、学院内の施設はかなり充実している模様。プールがあるということは、もちろん水着イベントに期待できちゃう!?

VII組新メンバー公開!

フィー・クラウゼル
15歳／使用武器「双銃剣」

いつも眠たそう＆若干面倒くさそうで、ネコのようにどこでも寝るクセのある少女。学院に入る前の経歴は不明だが、小柄ながら驚異的な身体能力を持っており。双銃剣（ダブルガンソード）という特殊な武器を使いこなす。一見とっつきにくいが人付き合いは悪くなく、真顔で冗談を言うことも。勉強は苦手で、エマやアリサから教わることが多い。

「……ん。上手くいった。」





フィールドアクション



3Dモデリング



3Dモデリング



フィールドアクション

「想いを伝えれば、ちゃんと解ってくれますから。」

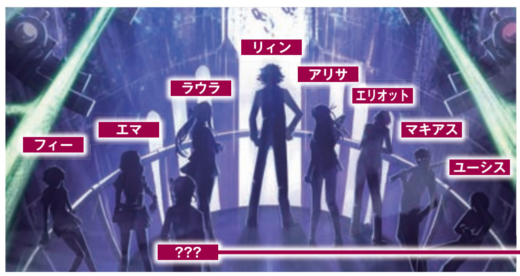
エマ・ミルスティン
17歳／使用武器「魔導杖」

眼鏡と三つ編みが印象的な、VII組の委員長。平民出身で実家も裕福ではなかいが、高等教育には興味があったため、奨学金制度が充実していた士官学院を目指し、見事トップの成績で入学した。祖母に教わったハーブの知識が豊富で、古い伝承やおまじないなどにも詳しい。同じ寮のリィンやアリサたちにも内緒でネコを飼っているようだが……。

CHECK!

VII組とは？

VII組パーティーも集結間近!?



新キャラクターだと思われる場面カットを入手!? 詳細は続報を待て！

トールズ士官学院に本年度から試験的に新設された、特別かつ例外的なクラス。新型戦術オーブメント《ARCUS（アークス）》の運用を主目的に、生徒は貴族や平民、身分にとらわれない選抜がされている。外国からの留学生もいるとか!? 委員長のエマはその性格ゆえ出自に関係なく、周りから信頼されている。ただ、マキアスは貴族に対して反感を持っているなど、一筋縄ではいかなそうな状況も？ なお、ほかにもクラスに生徒はいるようだ。



2つの視点でマップも見やすく！

CHECK!

フル３Dになった本作では、カメラ視点を左右に動かせるだけでなく、キャラへの距離も２種類から変更可能に！　遊びやすさもグンとアップしている。



さらにキャラのアップも！

遠・近だけでなく、さらに視点操作すればキャラの顔がアップになるまで視点を寄せられる。







ナビゲーションマップの下に表示

「阿保が―?少しは己を省みるがいい。」





ユーシス・アルバレア

17歳／使用武器「騎士剣」

「四大名門」の一つ、東部クロイツェン州を治めるアルバレア公爵家の次男。本人に悪気はないが、貴族らしい傲慢さをナチュラルに発揮し、マキアスと衝突してもあくまで余裕な態度は崩さず、彼の狭量さを嘲笑うことで火に油を注ぐことが多い。兄から習った伝統的な宮廷剣術の使い手。リィンやラウラの剣術にも興味を示している。



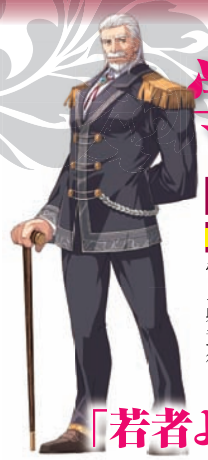
「くっ、旧態依然とした貴族に負けてたまるか！」

マキアス・レーグニッツ

17歳／使用武器「ショットガン」

帝都を管理する、革新派のレーグニッツ帝都知事の息子。秀才タイプで、自分にも厳しければ他人にも厳しい。入学試験では惜しくも首席を逃がし、VII組の副委員長となる。貴族制を公然と批判し、貴族生徒に対しても敵対的に振舞う。そのため大貴族出身のユーシスとは事あるごとに対立し、結果的にクラスの雰囲気を悪化させてしまうが……。

学院関係者



ヴァンダイク学院長

70歳／使用武器「斬馬刀」

帝国軍の名誉元帥でもある、トールズ士官学院の老学院長。２ｍ近い巨躯の持ち主で、現役を退きながらも武術の腕は衰えていない。たまに生徒たちの武術訓練に混ざってくることも。

「若者よ、世の礎たれ――ワシの方からは以上じゃ。」



ナイトハルト少佐

29歳／使用武器「軍用サーベル」

帝国正規軍（第四機甲師団）から出向している軍事教官。生真面目で愛想に欠ける性格。サラの実力は認めながらも、その生活態度や柔軟すぎる教え方に難癖を付け、衝突することも多い。

「質実剛健こそ帝国軍人の本質――精進するがいい。」



今月のこの1枚　サラもパーティーに加わる？

サラが操作キャラとして動いている!?　これは、開発中だからか？　それとも……。超期待せよ！



↑モデル顔負けに優雅に歩くサラ。彼女の名字が、バレンスタインというのも気になるが!?

「フフン、文句があるなら掛かってきなさいっ！」



サラ・バレスタイン

25歳／使用武器「導力銃＆ブレード」

特科クラス"VII組"の指導＆担任をしている女性教官。導力銃と強化ブレードを使う戦闘スタイルで、我流だが恐るべき戦闘力を誇る。私生活はだらしなく、居酒屋でビールがデフォルト。タイプはナイスミドルらしいが、なかなか眼鏡に敵うオジサマがいないとか。

魔獣図鑑

新たな魔獣も初公開！　魔獣たちも続々とロールアウト！

前回に引き続き、魔獣のモデリングを大公開。過去作の画像も掲載するので見比べてみよう。





ポム

ＣＰを吸ってくる、厄介な敵。目が黒目になり、キュートさがアップ！　ポムっとさ加減に注目!!

ドローメ

アーツを操る軟体魔獣。これまでは殻のようだった下半身が、本作では気持ち柔らかめになっている？





???

デュラハーンを思わせる、鎧に包まれた魔獣。上位三属性が働く場に出現する、魔物のようでもあるが……？　かなりに強敵になりそう！

リィンの妹の存在も判明！



エリゼ・シュバルツァー

15歳

リィンの義妹で、シュバルツァー男爵夫妻の実子。１年前から帝都にある「聖アストライア女学院」に通っている。幼い頃はリィンに懐いていたが、女学校に入る前あたりから、少しよそよそしい態度をとるようになった。しかしある出来事がきっかけで、リィンに会うべく士官学院を訪れて……。

「――ご自分の胸にお聞きになってください。」

英雄伝説 空の軌跡
～リベール王国スナップショット～

第9回『黄昏の少女』

著：はせがわみやび

1.

リベール王国、王都グランセル。

街の西区画にリベール通信社の編集部は存在する。

建物の二階にある狭い編集室には、ずらりとデスクが並べられていて、熱い報道魂を持つ記者たちの軽やかなタイプの音が、朝も早くから鳴り響いていた。

「君を除けば、だがな、ナイアル君」

「……えっ。何ですって？　編集長」

リベール通信の記者のひとり、ナイアル・バーンズはつっぷしていた顔をあげた。

目の前に立つ編集長の顔が怒っているように見える。

――おや？

「ナイアル君！」

「っ！　つう……へ、編集長……もうちょっと声を抑えていただけませんかね？　ああ、くそ、頭が痛くて……」

「ほう、そんなに痛いのか」

「そりゃもう。脳みそにぶっとい針を刺したみたいに――って言えばわかりますか」

「それはひどい」

「まったくです」

「最悪だな」

「最低です」

「ふむ。その頭の痛みはどうして生じているのかね？」

「どうしてですかね。俺も不思議なんです。ひょっとして編集長はご存じなんですか？」

「ああ、はっきりとわかるとも」

「と、いうと」

すうっと編集長は息を吸って、それから声を振り絞った。

「二日酔いだからだ！」

キーーーーーン、と刺すような痛みがナイアルの頭のてっぺんから耳の後ろのほうにまで抜けていった。あやうく気絶するところだ。

「う……ぐうう」

「まったく！　自分がどれほど酒の匂いを撒き散らしてるか、わかってるのかね！」

「あー。そんなに？」

反対側の島に座っている同僚の女記者が、眉をひそめながら、「ひどいもんですよ、ナイアルさん」と言った。

その言葉に、ナイアルは頭の後ろを掻く。

「ハハ……」

「笑っとる場合か！　酒を呑むなとは言わん。だが、君はわたしの見ている限り、今日出社してからずっとそうして机につっぷしてるじゃないか」

「おっと、それは違いますよ、編集長」

「ちがう、だと？」

ナイアルは間違いを正すことにした。

「家に帰ってないので、正確には昨晩からずっとっていう……」

正直に言った。昨夜はこの部屋に泊ったのだ。椅子を三つ並べてそこで寝ていた。締め切り間際によくやることだったから慣れている。疲れも取れないし、起き抜けはちょっとばかり全身が固まって痛くなるけれど。

編集長の顔が真っ赤に染まる。

「ばっかもーーーーーーーん！」

倍の声量で怒鳴られた。

窓がびりびり震えるほどの大声だ。

部屋の中の全員が思わず顔をしかめ耳を手で塞いでいる。

ナイアルの頭の痛みは倍に膨れ上がった。あ、死にそう。

「そんなんで仕事になるか！　お前は今日はもういい！　あがれ！」

「いやでも編集長。例の脅迫状の件の情報をまとめないとですね――」

じろり、と睨まれる。

これ以上ひとことでも反抗してみろ。口には出せないほどのひどい罰を与えてやるぞ。編集長の目はそう語っていた。

――まじだな、こりゃ。

「わかった。わかりましたよ。大人しく休みますとも」

「そうしろ。特別休暇を与えてやる。これは命令だ」

「へいへい」

机の上に放り投げてあった財布を掴み、尻のポケットへと捩じりこむ。

よれよれの上着を羽織ると、「じゃあ」と軽い挨拶を同僚たちへと送る。

机の横に立ったまま睨んでいた編集長にも頭を下げてからドアを開けようとしたところで、ナイアルは振り返った。思い出した。

「編集長」

「なんだ?」

「こいつは有休あつかいになるんですかね?」

編集長のこめかみがピキッと引きつるのが見えた——ヤバイ。

「あ、じゃあ、あがるんで後はよろし——」

「減俸だ————!」

背中のほうで編集長の声が響いたが、そのときにはナイアルは一階へと向かう階段を転がるように降りていた。

減俸の叫びは聞こえなかったことにする。

まあ、三日も経てば忘れてくれるだろう。

忘れてくれると嬉しい。

ただでさえ薄給なのだ。

「まいったな……」

建物の外へと出た。

明るさに目をしばたたかせる。

空が青かった。いい天気だ。今日は暑くなりそうだな。

通りの向こうに馴染みのコーヒーハウスが見えた。

「とりあえず、頭をすっきりさせるとするか」

通りを渡りながら、ナイアルは何気なく上着のポケットへと手を入れる。

何か、硬いものに触れて、おや、と思う。

つかみ出してから、ナイアルは思い出した。

「入れっぱなしだったか」

触れたものは手のひらに乗るほどの小さなカメラだった。

最新型のオーバルカメラで、どんな素人でもそれなりの写真が撮れるという触れ込みのやつだ。

この普及型の簡易カメラは同僚のカメラマンがナイアルに渡してきたものだった。

『これ、ちび君です。わたしのいない間、ちび君をわたしだと思って大切にしてくださいね、ナイアル先輩』

そう言って、ボースへの出張前にトンチキ娘が置いていったのだ。

「んなこと言われてもな」

ナイアルは記者であってカメラマンではない。

カメラを渡されても困る。

手の中でぽんぽんと重みを確かめるように遊ばせてから、ナイアルはオーバルカメラを上着のポケットへと戻す。

——まあ、どうせ休暇だ。

一日カメラマンの真似事をしてみるのも面白いかもしれない。

2.

通りを渡った先のコーヒーハウスで、カレーとコーヒーを胃袋に入れた。

「二日酔い、収まりましたか?」

マスターに訊かれて、まあな、とナイアルは曖昧に答える。

ひと息ついたところで、ナイアルは、昨夜のことを思い返した。

夜、あの遊撃士の娘エステルに呼び出されたのだ。

居酒屋《サニーベル・イン》を訪れたナイアルを待っていたのは、大勢の遊撃士たちだった。仕事が一段落したところらしく、せっかくだから皆で夕食を、ということになったらしい。何故そこに自分が呼ばれることになったのかは謎だったが。

——まあ、あいつらとは腐れ縁だからなぁ。

見知らぬ顔も何人かいて、紹介されたはずなのだが、正直なところナイアルはよく覚えていない。

とんでもない酒豪が居て、そいつに酒を勧められたのが運のつき。

ナイアルもけっして酒に弱くはないのだけれど、あれは異常だ。こちらが意識朦朧となっているのに、けろりとした顔でお代わりを注文しやがる。

おかげで家に辿りつくこともままならず、オフィスの椅子で夜を明かすことになったわけで……。

勘定を済ませて店を出た。

ポケットからカメラを取り出す。

——さて、何から撮るかな。

小路を散策しながら右に左に視線を振る。

工房の裏手の積み重なった空き箱の上に猫がいた。

茶色の子猫が二匹。どうやら兄弟らしく、白地に茶の模様がよく似ていた。

ひょい、と一匹が隣の箱に跳び移る。

振り返って、どや顔をした。

遅れたほうの一匹が後を追おうとして跳んだが届かない。

脚の先が木箱に引っかかったけれど、そのままずるっと落ちてしまう。

なー、と鳴いて、うらめしそうに兄弟を見上げる。そっくりなのに運動能力には差があるらしい。

思わず頬がゆるんだ。

カメラを構えて――シャッターを押したが反応なし。

「んん？」

改めて機体を見直す。確か、ほとんどの操作は自動でまかなえると聞いていたのだが。

シャッターを押すだけですよ、先輩――と。

ああ、と納得。メインの導力スイッチがオフになっている。

これでは導力エネルギーが流れない。

スイッチを入れると、機体の背後にある投映板に画像が現れた。

ファインダーを覗かなくても、原理的には投映板を見ながらシャッターを押して撮影できるわけだ。昔の光学カメラにはこれが無かったらしくて、どんな絵が撮れたかは、現像するまでわからなかったらしい。

それに比べればなんと楽になったことか。

ふたたびカメラを構え、ファインダーを覗こうとして、ナイアルは「あれ？」と声に出して言ってしまった。

――あいつら、どこへ行ったよ？

カメラから目を離したとき、にゃあ、という声を耳が捉えて顔をあげた。

いつの間にか、段々に積み重なっている木箱のいちばん上にいた。

ナイアルの顔からすぐ近くだ。目と鼻の先。カメラのファインダーで覗くと、猫の顔が大きくいっぱいに見えて――。

にゃーーーー！

飛びかかってきた！

思わずシャッターを切ったが、子猫はそんなものには構わずにナイアルの顔へと飛び移った。爪がナイアルの頬をかすめる。そのまま肩を踏んで、足下へと降りた。

脚の間をすり抜けて、小路の奥へと走っていった。

痛む頬を抑えると、かすかに血が滲んでいた。

ナイアルは投映板に目を下ろす。画面の半分を、飛びかかってくる猫の顔が占めていた。ぶれまくっていた。

「あちゃあ……」

見事な失敗写真だ。

「猫はやめだ。やめ！」

自分のような素人がやんちゃに動き回る子猫を撮ろうなどと考えたのが間違いだ。

ため息をついてしまう。やはりカメラマンの相棒のようにはいかない。

ナイアルは都一番の大通りへと出た。

通りの南の端には噴水があって、子どもたちと老人がひとり、鳥に餌をやっていた。

パンくずらしきものを千切ってはばらまいている。

ぜんぶで十羽ほどもいる小鳥たちが、石畳に落ちたパンをつついて食べていた。

これこそ平和な光景ってやつだ。

そう思ったナイアルは今度こそとカメラを構える。

よい構図を探してファインダーを覗きながらうろうろとしていたら、通りを歩く男とすれ違いざまにぶつかった。

思わずよろけてしまう。身体が前に泳いで、たたらを踏む。

「ぼさっとしてんじゃねえよ！」

怒鳴られた。

顔をあげると、いかつい顔に濃い口髭を生やした男が睨みつけていた。

「あ、すまん――すいません」

慌てて言い直す。

すいませんとか、柄でもない言い方だ。だが、これは明らかに自分が悪い。

そして写した写真はまたもピンボケである。落ち込んだ。

――だから、俺は記者であってだな、カメラマンじゃねえ……。

心の中でつぶやく。いったい誰に言い訳をしているのやらと自分でも思った。

「やめだ、やめ。柄じゃねえよ」

ポケットの中にカメラを落として、気を取り直して顔をあげた。

ナイアルにぶつかった髭面の男の背中が人ごみの中へと消えていこうとしていた。

あ、とナイアルは声をあげてしまう。道の先で、男とすれ違おうとした少女がナイアルと同じようにぶつかったのだ。

「きゃあ」という悲鳴があがった。

派手に吹っ飛ばされて石畳を転がる――なんてこった。

ぶつかった男がナイアルに対してと同じように怒鳴った。

少女がびくりと身体をすくませ、石畳の上でみるみる顔を歪ませる。火がついたように泣きだした。

ナイアルは駆けだした。

男が舌打ちをした。ポケットに両手を突っ込むと、背中を向ける。

助け起こそうともしない。

――あんにゃろ！

「お、おい！ 待てよ！」

ナイアルは背中に声をかけるが、男は振り返ろうともしなかった。

3.

石畳にぺたんと腰をつけたまま、女の子は泣いていた。

通りを行き交う人々は遠巻きにしてちらちらと少女とナイアルを見ている。

――俺が泣かせたんじゃねぇ！

誤解だ、と言い訳を言うよりも大事なことがある。ナイアルが泣かせたわけじゃないのだが、このままにはしておけない。

「大丈夫か？　ほら、立てるか？」

手を取って起こしてやり、服をはたいてやりながら、噴水の縁に座らせる。

泣き顔でもわかる。整った顔立ちをした、えらく可愛い子だった。

日差しを返して紫がかって見える珍しい髪の色をしていた。

その髪を飾るのは、頭の上で結んだ、子どもには似つかわしくない黒いリボン。

服も少しおとなっぽいような……。上下で柄を揃えた、白と黒を基本にしたふわっとした服を纏っていて、胸元を飾るタイの色だけが赤かった。

もう少し……十七、八の娘が着たら、さぞ映えるような落ち着いた服なのに、なぜか顔を歪ませて大泣きするこの小さな子には似合っているような気がする。

どうやら怪我はしていないようだが――。

「お、おい。そんなに痛かったか？」

少女は首を左右に振る。

「困ったな……」

泣き止まない女の子のご機嫌を取るには……。

――あれだ！

噴水の近くには屋台が何軒か出ていた。

そのうちのひとつに、クレープ屋があった。『すいーとクレープ』ってやつが三百五十ミラだ。女の子ってやつは砂糖菓子でできているものらしいし。

「おい。ちょっと待ってろよ。今……」

尻ポケットに捻じ込んだ財布に手を伸ばして――はっとなる。

ない。

「え……？」

思わず何度もポケットを叩き、手でさぐる。確かにここに入れたはずだが。

焦る。左右の上着のポケットも漁るが、当然そこにもない。

「あれ？　いやまて、あれ？」

ナイアルは気づいた。

「まさか――さっきの……」

すれちがった髭面の男だ。ぶつかって、ナイアルをよろけさせた男。少女を転ばせた男のことだ。あいつがまさか――

スリとった？

唇を噛みしめる。

気付かなかった。

「やられた……。なんてこったよ。あの野郎、ぶつかったのはわざとか！」

どうするナイアル？　自問自答してしまう。たいした額は入っちゃいないとはいえ、今日明日に使うくらいのぶんはあの中だ。

うつむいて考えこんでいた鼻先に、にゅっと財布がひとつ突きだされた。

ナイアルのだ。

「へ？」

蛇革の見慣れた財布。

「これ……って」

財布を握っているのは小さな手だ。上に向かって伸ばしてきている腕を辿って、相手を見る。

差し出してきたのは先ほどまで泣いていた紫の髪の少女だった。

「はい」

「へ？」

少女の瞳がナイアルを見上げている。琥珀色の吸い込まれそうな瞳。びっくりしたのは、その目に涙の欠片も見当たらないことだった。

「いらないの？　おじさんのでしょ、これ？」

澄んだ声でそんなことを言う。

「ど、どこでこれを」

「拾ったのよ」

「拾った？」

ナイアルが落としたのか？　いや、そんなはずはない。ナイアルはよろけはしたが、転んではいない。それに、ナイアルと男がぶつかったのは、この噴水の手前で――。

むしろ、ここであの男とぶつかって転んだのは少女のほうだ。

「拾ったのよ」

少女は繰り返した。

ナイアルを見上げて、にこりと微笑む。

「……ありがとう」

「お礼はあれでいいわよ？」

あれ、と言いながら、ちらりと屋台のほうを見る。先ほどのクレープ屋だ。

「……ちょっと待ってろよ」

ナイアルは財布から小銭を取り出して、『すいーとクレープ』をひとつ買う。もちろん、硬貨を取り出すときに、ざっと財布の中身をあらためた。何もなくなってはいないようだ。

少女を疑うわけではなかったが……疑問は残る。

「ほら」

「あら、だめよ」

子どもっぽさの消えた表情。おとなびて見えた。

「……だめ？」

「そうよ。レディに贈り物をするのに、そんな言い方ってないと思うの」

そう言って、くすくすと笑うのだ。

「……。どうぞ、お嬢さん——これでいいか？」

言いながら、クレープを差し出した。

「ええ。ありがとう」

受け取って、少女が微笑む。その顔には涙の跡は見当たらない。どう考えても、あの泣いていたのは演技としか思えない。

「おい、あんた……」

そっぽを向かれた。

「よう。ちょっと話を聞かせて……」

「あんたじゃないもん」

「ああ？　あー、……お嬢ちゃん？」

「レン」

明後日のほうを見つめながら短く言った。

「は？」

「レン」

名前だと気づくまで、彼女の小さな口の中にクレープの残りが消えるまでかかった。

「なあ、レンちゃん」

そう呼びかけると、ようやくナイアルのほうに顔を向けてくれた。

「おじさんは？」

「へ？」今度はなんだ？「あー、ああ。ナイアルだ」

正解だったらしい。

ただ、奇妙だったのは、「そうね」と少女が聞こえるかどうかの声でそうつぶやいたことだった。まるでナイアルの名前を知っていたかのように。

ナイアルのほうは覚えがなかったのだが。

4.

噴水の縁石に腰をかけてナイアルはレンと名乗った少女に話しかける。

ナイアルが気になったのは、レンがひとりきりなことだった。

十一か、十二。それくらいにしか見えない。だがあたりに親のいる様子はない。大通りまで遊び場を広げにきた王都の住人にも見えなかった。ナイアルは日に何度もこの通りを歩いているが、今までこの子を見たこともなかったし。

「レンちゃんは——」

「呼び捨てでいいわよ、おじさん」

「俺も呼び捨てで構わないんだがな。だが、おじさんはやめてくれ」

「あら？　……おじさま？」

「丁寧に言えって意味じゃねえよ！」

「あら、まあ」

「俺はまだ三十前だ！」

「三十だったら、レンの倍だわ。随分と長く生きてるのねー」

——ば、倍って……。

「こ、このガキ……。くそっ、俺ももうそんな言われ方する歳になっちまったか」

「で、何かしら？」

「レン、君の保護者はどこだ？　子どもがひとりきりでいちゃ危ないだろ」

「あら。お兄さん。レディのプライベートな事情を聞きだすときは、まず自分のことから話すのが礼儀っていうものだと思うわ」

こまっしゃくれたことを言った。

「あー。ああ、そうだな。俺はリベール通信社ってところで記者をやってる」

「きしゃさん？」

「新聞を作ってるんだよ。わかるか？」

「ええ」

「そりゃよかった」

「あら？　でもじゃあ、仕事もしないでこんなところで可愛い女の子にクレープを奢っている場合じゃないのではなくて？　記者さんって忙しいのよね？」

「忙しいときもあるな。生憎、今日は休暇だ」

あと、自分で可愛いとか言うか、と突っこみたいところだ。それも含めて、自分の言葉を自分で意識して操っているような節があった。言葉に拘る仕事をしているナイアルの勝手な思い込みかもしれないが。

なんとなくふつうの子ども扱いできないような……。

レンが立ち上がった。

スカートを叩いて、食べたスイーツのくずを払う。

「ねえ、ナイアルおじさ——お兄さん」

「なんだ？」

「休暇中なら、レンに付き合ってちょうだい。レン、とっても退屈してたの」

「親が心配してないのかよ」

ナイアルの問いには答えず、レンは言う。

「あれもだめ、これもだめって言われてると、もう暇で暇でしかたないのよね」

　その台詞をナイアルは勘違いした。

「親ってのは、心配性だからな。子どもにはあれこれ言うものさ」

「そう……？　そうでもないけど。普段は止めたりしないのよ。レンの好きなようにやらせてくれるわ。そのほうがずっと楽しいの。でも、今回はやっちゃだめって言われてるの」

　やっちゃだめ。

　無邪気に言った他愛ない言葉に思えた。けれど、ナイアルの背筋は、その一瞬だけ、ぞくりと何故か冷たくなったのだ。たかが十かそこらの子どもの言葉に。

「せっかく王都まで来てるんだもの。もうちょっと見て回りたいのよね」

「グランセルの人間じゃないんだな？　旅行か？」

　ナイアルの言葉には笑みを浮かべるだけで答えなかった。

「そうね。夕方までいいわ」

「夕方……？」

「それ以上、はぐれていちゃ、ティータが泣いちゃうもの」

　ぽつりと意味不明なことを言ってくる。

　だが、どうやら親はおらず、誰かと別れてココにいるらしいことは感じ取れた。

　となると、放っておくわけにもいかないだろう。無理に訊きだしても話してくれないだろうことは薄々わかる。一筋縄ではいかない子だ。

「わかった」

　年端もいかない少女を放り出すこともできず、ナイアルはレンの退屈しのぎに付き合うことになった。

　噴水の周りに群がる鳥たちに餌をやったり、大通りを歩いてウィンドウショッピングをしたりして時間をつぶした。レンは口を開くたびに、いちいちこまっしゃくれたことを口にするものの、それなりに笑顔を見せてくれる。

　その笑顔を見てふと思いついたナイアルは、ドロシーから借り受けたカメラをポケットから再び取りだした。

　カメラをレンへと向けた。

　レンズを向けられたことを察知して、小物屋の棚をひやかしていたレンが振り返る。

　まるで職人の作った人形みたいな端正な顔だった。ピントが自動で合い、フレームの枠内にレンの作り笑顔が収まる。

　カメラに視線を向けて澄まし顔になった。

　絶好のシャッターチャンスに思えた。

　このままリベール通信に載せてもおかしくない。

　だが、シャッターボタンにかけた指をナイアルは外してしまったのだ。

「撮らないの？　おすましてあげたのに」

　自分でも何かわからないことを、もごもごと口にしてしまう。いやちょっと、とか何とか。言い訳にもなってない。

「なあに？」

「あ、いや……」

　レンが可愛らしく小首を傾げる。ナイアルに先を促した。

5.

　ナイアルはレンに向かって言う。

「あー、俺の本業は記事を書くほうでな。カメラについちゃ、詳しくないんでこんなことを言うと相棒に笑われそうなんだが」

「アイボウ？」

「ま、そんな感じのやつが同僚にいるんだ、カメラマンのな。おかしなやつなんだ。建物を撮るときも空を撮るときも、森や山を撮るときでさえ、人間を相手にするように、『はい、笑ってえ』とかイチイチ言うやつで」

「ヘンなの。空や木は笑わないわ」

「ああ。笑わないな。俺もそうは思うんだがな……」

　ナイアルはミニカメラをよれよれのスーツのポケットにねじり込む。

「そいつの言うことにはさ。自分がシャッターを押すんじゃない、んだとさ。風景が、自分にシャッターを押させるんだと」

　レンが小首を傾げる。

　本気でわからないという顔をしていた。

　無理もない。ナイアルにだって全て理解できているわけではないのだ。

　なんてったって、オーバルカメラの天才の言葉だ。

　天才がそんなに簡単に理解できれば苦労しない。

　もっとも、ナイアルは内心で小さな子を相手に、何を話しているのだろうとも思っていた。まるで何もかもわかっている、大人を相手にして話しているようじゃないか、と。

　それでも言葉は紡がれていく。

「撮るべき瞬間は向こうからやってくる。その感覚に従って、自分はシャッターを押しているだけ――なんだとさ。俺はまあカメラは素人で、あいつのように天才じゃないからこんなことを言っても笑われるだけなんだが。なんとなく今は……」

「その撮るべき瞬間って気がしなかった？」

「そんなとこだ。悪かったな、なんか面倒くさい話をしちまった」

「んー。よくわかんないけど、おじさんは別に悪くないと思うわ」

「そうか?」
「でも、どうしてもすまないって思ってるなら、そうね……」
　レンとナイアルは大通りに立ち並ぶ店をひやかしながら北へと歩いていてた。
　ちょうど、居酒屋《サニーベル・イン》の前を通りかかったところ。
　昼は軽食屋になっているその店を指さして、レンが言った。
「お腹空いちゃったわ。パイひときれでいいの。おごってくれる?」
　にこりと笑みを浮かべながら、上目使いでナイアルの目を覗き込んでくる。
　ちょっと小悪魔っぽく感じる笑みだ。
　まあ——ナイアルには子どもに色気を感じる趣味はないので、苦笑いを浮かべるだけに終わったけれど。
「……よく食うやつだな。ま、パイひときれでいいなら奢ってやるよ」
《サニーベル・イン》に入った。
　ちょうど昼食時だ。けっこう混み合っていて、ナイアルとレンは通りに面した窓際の一角になんとか席を見つけた。
　手作りパイもどき、と書かれた一品がランチのメニューにあった。
　ナイアルはまだ朝食からさほど時間が経っていなかったのでさほど腹が減っていない。レンも半分でいいと言ったので、ふたりして運ばれてきたパイを分けて食べることになった。
　美味しいわね、と言いながら食べていたレンだったが、その動きがぴたりと止まった。
「どうした?」
　顔を上げたレンは、ナイアルの肩越しに店の奥へと視線を注いでいた。
　その視線を追って振り返ろうとしたナイアルは、「振り返っちゃダメ」とレンにたしなめられる。
「ど、どうしたよ?」
「そうっと。見てるって気づかれちゃだめよ、ナイアルおじ——お兄さん」
　レンが気付かれないように見ろと言ってくる。
　くそ、無意識だとやっぱりおじさん扱いかよ、とか思いつつ、ナイアルは身体を半身にして、凝った身体を伸ばすふりをしながら、ゆっくりと後ろに視線を投げる。
　奥の薄暗いテーブルに親子連れらしき男と子どもがいるのが見えた。
　子どものほうは初めて見る顔だった。レンと同じくらいの歳に見えた。
　だが、男のほうに見覚えがある。
　ナイアルは、男が、さっき自分にぶつかった髭面のスリだと気づいた。

「あの野郎……」
「あのひとたち、パイを二皿注文したのよ」
　レンが小さな声で言った。
「……テーブルには一皿しかねえぞ?」
「食べ終わってから、子どもの服の内側に入れさせてたわ」
「無銭飲食かよ」
　テーブルの上の皿を、こっそり子どもに隠させたわけだ。なるほど、だからあんな隅の暗がりの席に座っているわけか。
　皿を盗むためではない。
　二皿ぶんの勘定を一皿だけで済ませようというわけだ。皿を隠して、あくまで注文は一皿だったと言い張るつもりなのだ。
「呆れたな。一皿ぶんを浮かせるためだけにそこまでやるか?
　たかが数十ミラの差じゃねえか」
「持ち帰った皿を売れば、もうちょっともうかるわよ」
「せこすぎる!」
　しかも、よく見れば、子どものほうは怯えた顔をしている。びくびくしていて、自分がやったことがばれるのじゃないかと怖がっているようだ。
　顔も似ていないから、ひょっとしたら親子ではないのかもしれない。
　だとしたら、ますますタチが悪い。ナイアルは怒りを感じた。
　視線をレンに戻す。
「どうする気だ?」
　ナイアルがそう言うと、レンはぽかんとした顔になる。
「どうするって?」
「ん? おまえさん、なんか考えがあるんじゃねーのか?」
　それは子どもに対して言うような台詞ではなかったと思う。ナイアルも自覚はしていた。無銭飲食をたまたま見つけた子どもに、どうする気かと尋ねるなど。
　おもしろがるような表情がレンの顔に浮かぶ。
「レンが? どうして?」
「違うのかよ」
「レンは子どもなのよ?」
「大人には見えねーな」
「お兄さんこそ、記者さんなんでしょ? ああいうのを放っておけないんじゃないかしら?」
「……まあ、そうなんだが」
「レンみたいな子どもに、何かできると思う?」
　もっともだ。
　もっともだとは思ったし、そんなことを目の前の少女に言うのはおかしいことはわかっていた。だが、ナイアルは自分

の直観を信じる性質だった。
「なんとなく、できる気がしてるんだが……」
「あら」
「わざわざ俺に教えて、俺を操らなくてもな」
　そう言うと、目の前の美少女の顔から笑顔が消えて、
「――ふぅん。お兄さんって意外と……」
「なんだよ」
「アイボウってひとに、『いじめっこ』って言われてないかしら？」
「あー、そういやたまに言われるな。『ナイアル先輩ってばイジワルですぅ』とか」
「だと思った」
　そう言ってから、椅子からすとんと降りる。
「話、合わせてくれる？」

6.

　ナイアルの返事を聞く前に、レンはもう行動を起こしていた。
　奥の席の男が、ウェイトレスを呼び勘定を済ませようとしていた。
　予想どおりだった。
　二皿ぶんの代金を、勘定書きを見ながら受け取ろうとするウェイトレスに、俺たちは一皿をわけあったのだと髭面の男が主張したのだ。
　ウェイトレスは「そんなはずは」と困り顔なのだが、男は強気で一皿ぶんの勘定しかテーブルに置かない。
　お客様、困ります、と抗議するウェイトレスに、男は顔を真っ赤にさせて、声を荒らげる。
「この店はぼったくりかよ！　倍も払わせようってのか！」
　ウェイトレスがおろおろとうろたえ始める。
　左右を見廻して他の客に助けを求めるのだが、髭面の男は目立たない隅の引っ込んだ席を選んでいたから、客たちも何も言えないようだった。
　十八、九の臨時らしきウェイトレスは泣きそうな顔になる。
　そんな状態の席に向かって歩いていったレンは、最後の数歩を小走りにして、男の子のほうに抱きついたのだ。
「ウィル！　ひさしぶりね！　元気だった？」
　シャツの内側に皿を隠したまま男の脇に立っていた男の子は、いきなりレンにだきつかれて焦っていた。
　大声を張り上げていた男が何が起こったかと男の子を見る。
　男の子のほうも髭面の男を見上げた。
　その一瞬の隙に、シャツの裏からレンがこっそり皿を抜き取ったのを、ナイアルだけは見て取ったのだ。
　いや――。
　おそらく、ナイアルにだけわかるように見せた。
　――ああして、財布を取り返したわけか。
　ナイアルは悟る。
　おそらくあのときも、噴水のところでナイアルから髭面の男が財布を抜き取ったのを、レンは見ていたのだ。
　レンは男の子にしがみついて動きを封じたまま、奪い返した皿をそっと髭面の男に悟られないようにしてテーブルへと返した。
　当然ながら、男の子のほうも何をやられたかわかっている。
　シャツの内側に冷たい皿の感触がなくなっているのだ。背格好が同じくらいの少女に抱き着かれているとはいえ、そこまでされてわからないはずがない。
　男の子は明らかに焦っていた。
　何とか男のほうへ何が起こったか訴えようとしている。
　ちらりとレンが視線をナイアルに投げてきた。
　――出番はここか。
「どうかしましたか？」
　言いながら、ナイアルはさりげなく男とウェイトレスの間に割り込む。
　背中のほうで、ウェイトレスがほっと安堵の息を吐いたのを感じた。
「なんだてめえは……」
「いえ、何か揉めているようでしたので」
　そこでくるりとウェイトレスのほうへと向き直り、彼女の持っていた勘定書きに手を伸ばす。
「ちょっと拝見」
　確かにパイを二皿と書かれていた。それだけ確認すれば充分だ。
「パイを二皿……ですよね、何か問題が？」
　言いながら、ナイアルはわざとらしくテーブルへと視線を投げた。
　ナイアルの視線に釣られて、ウェイトレスも男もテーブルを見た。
　二皿、並べられている。
　髭面の男が口をぽかんと開け、絶句していた。
「そんな馬鹿な、ちゃんと隠して」
　とぽろっと言ってしまい、「ボ、ボスぅ」と男の子がますます怯えた顔になる。
　自分の失言に気付いて、男も言葉を一瞬詰まらせ、
「二皿、ですよね？」
　ナイアルは重ねて言う。
　男がナイアルを睨みつけてきた。ナイアルは刺すような目

つきで睨まれたが、なんとか笑顔を保ってみせる。男がはっとした表情になった。どうやら、ナイアルの顔を思い出したらしい。
　ナイアルは笑顔を崩して睨みつけた。
　ドロシーに言わせると、先輩は目つきが悪い、そうだ。睨むとおっかないと言われていた。失礼なやつだよな、と内心思うが。まあ、こういうときは利用価値がある。
　ちっと舌うちをして、「おい。けえるぞ！」と髭面の男が男の子の腕を乱暴につかむ。男の子が痛みに悲鳴をあげた。
　形勢不利と判断したのだろう。
　スリの男はテーブルに二皿ぶんのミラを叩きつけて逃げるように店を出ていった。
「ありがとうございます！」
　ウェイトレスが頭を下げた。
　ようやく騒動を聞きつけてやってきた店の主人からも礼を言われてしまう。
　ナイアルは何もしていない。
　やったのはレンだったのだ。だが、そうは言っても信じてくれないことは確実で、レンのほうも、「お兄ちゃん、怖かったぁ」などと猫をかぶる始末だ。
　店の主人から、パイを追加で一皿お礼におごってもらってしまう。
　ナイアルは追加の皿をレンの前へと滑らせた。
「いいの？」
「子どもは育たにゃならんだろ」
　じゃあ、とレンは遠慮なくパイを頬張った。
　にっこりと笑顔になり、忙しそうに口を動かすレンを、ナイアルは黙って見つめた。
　――こいつ、何者だ？
　そう思ってしまいながら……。

7.

　店を出るとすでに夕方だった。
　あたりは暮色に沈み、通りの人影は減っていた。
「じゃ、レンはもう行くわ。」
　レンが言った。
「送らねえでいいのかよ。物騒だぜ」
「グランセルは治安がいいので知られてるのでしょう？」
「俺もスリに会うまではそう思ってたんだがな」
　そう言いつつも、こいつにはナイアルの護衛なんていらないんじゃないかと漠然と思ってしまう。
　しばらくふたりとも黙って見つめあった。
　正体を聞いても、応えちゃくれないんだろうな、とナイアルは思う。
「あの子……」
　夕焼け空を眺めつつ。ぽつりとレンがつぶやいた。
　あの子、というのが、先ほどのスリの男の手伝いをさせられていた男の子のことだとわかる。
「親を亡くした子が悪党の手先にされるなんてえのは、たまに聞く話だけどな。ありゃ、どう見ても親子じゃねえし。まさかこのグランセルで見るはめになるとはなぁ」
「むしろ王都だから……。豊かな街は暮らしていくのにミラがかかるもの」
　レンの言葉に意表を突かれた。
　それから、言葉の意味を理解する。豊かな街ってのは、たいてい物の値段が釣り上っていくものなのだ。仕事があればそれだけ稼げるから。
　だが――一度、落ちてしまうと……。
　生活はますます苦しくなる。物を買うにはミラがかかり、仕事を得ようにも、年端もいかない子どもを雇ってくれるところはない。
　ひとりで生きていけないから、悪党でも頼らざるを得ないというわけだ。ひどい男のところに身を寄せたものである。
　ナイアルは記者としては見識が甘かったなと反省してしまう。
　こんな子どもに諭されるとは。
「そうだな。子どもだもんな。まだ親に甘えている歳だもんなぁ」
　何気なく言った言葉だった。
「親？」
　レンが妙な顔をする。ナイアルは「だろ？」と同意を促すがレンは何も言わない。
　会話の流れが止まってしまい、ナイアルは頭の後ろを掻きながら言う。
「こういう件は七耀教会の出番なんだがな……。何にせよ、子どもに悪事の片棒を担がせるなんてのは見過ごせねえ。この件は、きっちり上と遊撃士協会に報告しておくから、お嬢ちゃんは心配しなくていいぜ」
　ナイアルの言葉に、だが、レンは意外なことを告げる。
「心配はしてないわ。ミラはあげたもの」
「は？」
　何を言われたのか、一瞬わからなかった。
「千ミラ渡したの。これで逃げてひとりで生きていきなさいって」
「なっ！　ど、どこからそんなミラ」
「別に盗んだわけじゃないから心配しなくても平気よ」
「いやだけど、千なんてどこから……」

「あったのよ。いけないいけない?」

「いけないってこたーねえが……」

ナイアルはまじまじとレンを見つめてしまった。

本当に何者なんだこいつは。

「後は知らないわ。きっかけは与えたもの。あれをどうしようとあの子の勝手。そのままボスに献上して奴隷のままいようが、一日で使い果たしてのたれ死のうが」

夕焼けの中、氷のように表情を固めたままレンが言った。

天使のように整った顔立ちなのに、凄味があって、もうとても単なる小さな子どもには思えない。

その無表情を崩して、作り笑顔で「今日は楽しかったわ」とレンが言った。

「あ、ああ」

「ありがとう、ナイアル・バーンズ」

そう言って、そのままくるりと背中を向けると通りを歩き去っていく。

ナイアルは一歩も動けず、ただ見送ることしかできない。

告げていない苗字までレンが口にしたことにさえ思い至ることはできず――。

ほとんど無意識でポケットからカメラを出してシャッターを切っていた。

黄昏の中に小さな天使の背中が消えてゆく。

闇が訪れた。

エピローグ

数日後。

出張先のボース地方から、リベール通信社のカメラマン、ドロシーが帰ってきた。

社に顔を出すやいなや、ナイアルのところまで小走りにやってくる。

「ただいまですぅ!」

ナイアルは顔もあげずに書類を読むふりをしていた。

いちいち付き合ってると、仕事にならない。

だが、ナイアルに無視されたくらいで堪えるドロシーではなかった。

ナイアルだって、それはわかっていたが。

「おやあ? センパイ、それはなんでしょう?」

しまった、と思った。

無視してる場合じゃなかったのだ。うっかりしてた。

ナイアルの机の上には写真が何枚も並んでいたのだ。

ドロシーから借りたカメラ『ちび君』で撮った写真がちょうど工房から焼きあがって届けられたところだった。

「見るなよ」

「ほうほう。おー、ひっどい写真ばっかりですねえ。ぼけてるわ、露出がヘンだわ。オートで撮ってるのに、手ブレとか。オーバルカメラに謝れって感じですよぅ」

「うるせえよ!」

言い返しながら声に力がない。

ちくしょう。これぱっかりは見られたくなかったのに。

「ああ、これ、返すからな」

小さなカメラをドロシーに渡した。

ドロシーはカメラを受け取りつつも、夢中になってナイアルの撮った写真を検分していた。

――恥ずかしいから、やめてくれ。

ドロシーの言う通り、まともな写真が一枚も撮れていなかったのだ。

「すっごいですねえ、ここまでひどいと芸術ですよぅ!」

「黙りやがれ」

「あれ、照れてますか、先輩」

「照れじゃねえよ……」

テーブルの上に視線を落とす。目に入った一枚を見つめた。

ぼんやりと頬杖をつきながら見つめたその写真は、夕焼けを背にして映っている少女の写真だった。背中しか映っていないし、夕暮れの中でフラッシュも焚いてないから、ひどく暗い。

失敗作のひとつでしかない。

今にも闇に呑まれて消えてしまうそうな後ろ姿に、だがナイアルは不思議と視線を外せないでいるのだった。

脇から手が伸びて、その写真をつまんでドロシーが口を開いた。

「あ、でも、これは良い出来ですよぅ」

思わず頬杖を解いた。

ドロシーの顔を見てしまう。

「それが? いい?」

「はい。これだけですかね、ちょっとでもマシなのは」

「その一枚がねえ……。暗くて色も満足にわからねえし、背中だけで、しかも小さくしか映ってねえぞ」

天使のような美少女だったのだ。

それを知っているナイアルにはあまりにもその写真はひどいもので……。

「いえいえ。だって、写真が写してくれてありがとうって言ってますよ」

「そんなもんかね」

「もしここにわたしがいたら。わたしでも、この瞬間のこの構図を切り取ると思います。いい写真です。見ただけでタイトルも浮かんじゃいますね。タイトルは、そう……」

オーバルカメラの天才が静かに言った。

「『孤独』ですかね」
ドロシーの言葉を受けて、
黄昏の中を立ち去っていった不思議な少女の面影が、ナイアルの心の奥にことりと音を立てて残った。

END



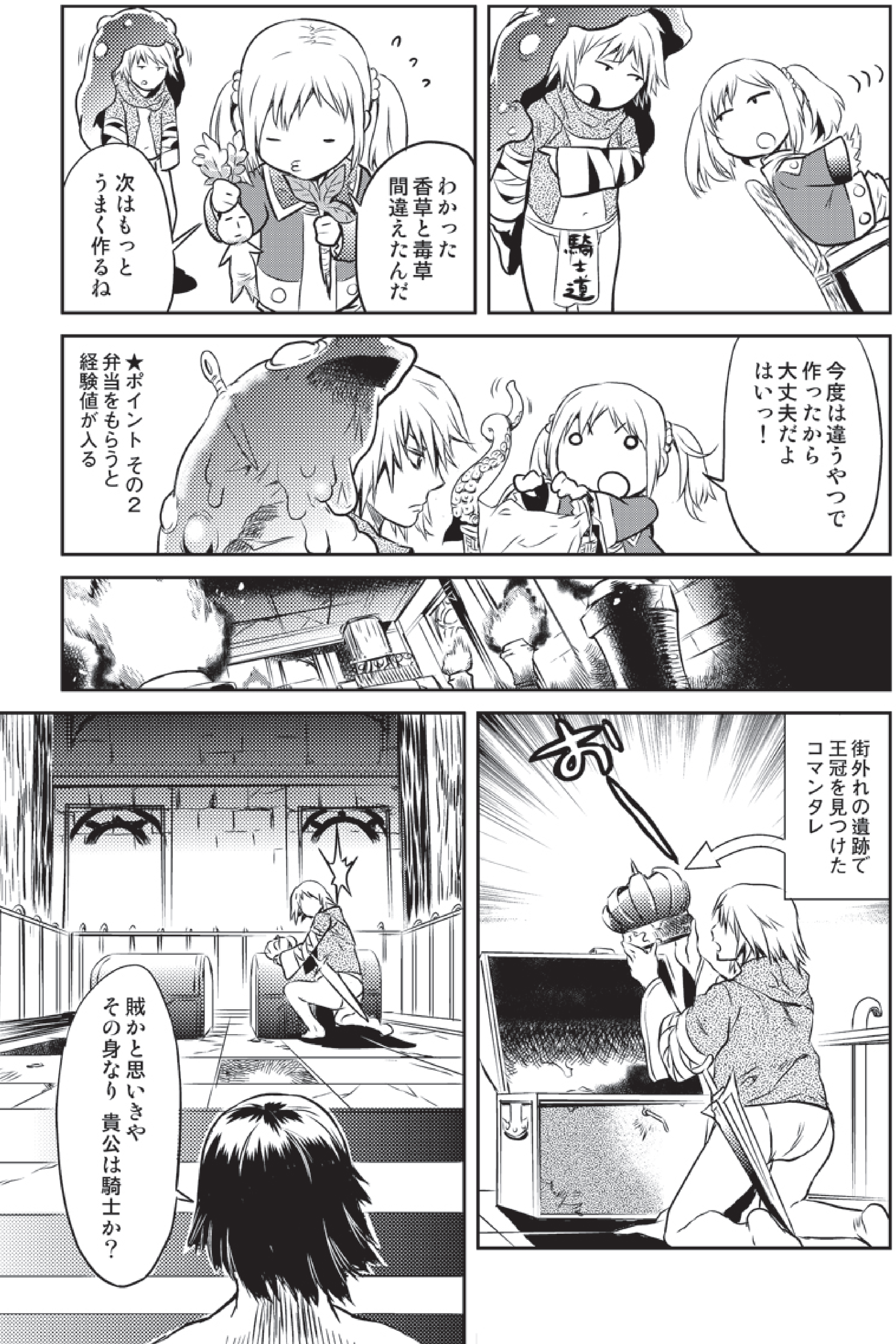

★まだ見ぬ秘宝を求め、騎士は今日も○○○一丁!?
XANADU NEXT
浜田ぢゅんいち
…あんたもあの霧に隠された城に興味があるのかね…
宝探し…夢と栄光を求めて…そういう人をわしはこの船で何十人も運んできた…
ギ…
戦争があってからはそういう人も減ったがね夢より明日のパン…
『ザナドゥ』の秘宝も腹の虫には勝てんというわけだ
シャーロット・L・ウェルズ
通称シャル
若くして考古学に精通する
アカデミーの特待研究生
ところであんたの連れ…あの身なり…騎士かい?


英雄伝説 零の軌跡
FB ファルコムBOOKS
午後の紅茶にお砂糖を
著者:むらさきゆきや
イラスト:窪茶
こんな『零の軌跡』もアリ!?
日本ファルコムの大ヒットＲＰＧ『零の軌跡』・『碧の軌跡』の主人公【特務支援課】の日常は意外とまったり!?　本編とは一味違った彼らのゆる～い毎日を描いて『月刊Falcommagazine』で大人気を博したノベライズがついに単行本で登場！
12月6日発売!!
価格:1,155円(税込)
ISBN:978-4-89610-255-0
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行:フィールドワイ
発売:メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


ふんどし一丁なんて古風な身なりは騎士以外ありえねえ
彼はいまどき珍しい昔かたぎな男なのよ
騎士道
あたしは彼がこの旅で笑顔を取り戻すことができればいいと思うの
水辺の街
ハーレック
見えてきたわ あれがハーレックの街?
お嬢さん せめてズボンをはかせてやってくれや
彼…同じ孤児院で育ち兄と慕った騎士のコマンタレは自分の主を失い途方にくれていた
そんな彼を見るにしのびなく考古学調査に連れ出したあたし…
ひろってください
軽いウツなら体を動かすのがいちばん
ゆけっ
コクコク
騎士道
暴れてストレス発散してきなよ


さすが遺跡の上に建っている街 宿の裏にはいきなりダンジョンが
ヘンタイだー!!
うチなー おかんにヘンタイ おるゆうてくるな
騎士道
ねりゃああ
『ローブ』
旅装として好まれることが多い
厚手のものは防具としての
効果を期待できる


★ザナドゥネクストのポイント その1
ローブはタダ
おかえり コマンタ…
あっ!?
連れてきてよかった! 何かが変わりはじめたのねっ!
コク
シャルお弁当作ったの! これ持ってバンバン戦ってきなよ!
もしゃ もしゃ
ぷしゃ
コマンタレの攻撃→スライムに23ダメージ
シャルの弁当 →スライムに504ダメージ


わかった 香草と毒草間違えたんだ
次はもっとうまく作るね
今度は違うやつで作ったから大丈夫だよ はいっ!
★ポイント その2 弁当をもらうと経験値が入る
街外れの遺跡で王冠を見つけたコマンタレ
おーっ
賊かと思いきや その身なり 貴公は騎士か?



この時代の騎士はみな腑抜けばかりと思っていたがな
本物の男は越中一本よ
その王冠は渡してもらおう…やつの手に渡る前に
いやだ
ほう渡さぬ構えだな
ならばそのフンドシごと打ち砕いてくれよう
騎士
はぁぁぁぁあ



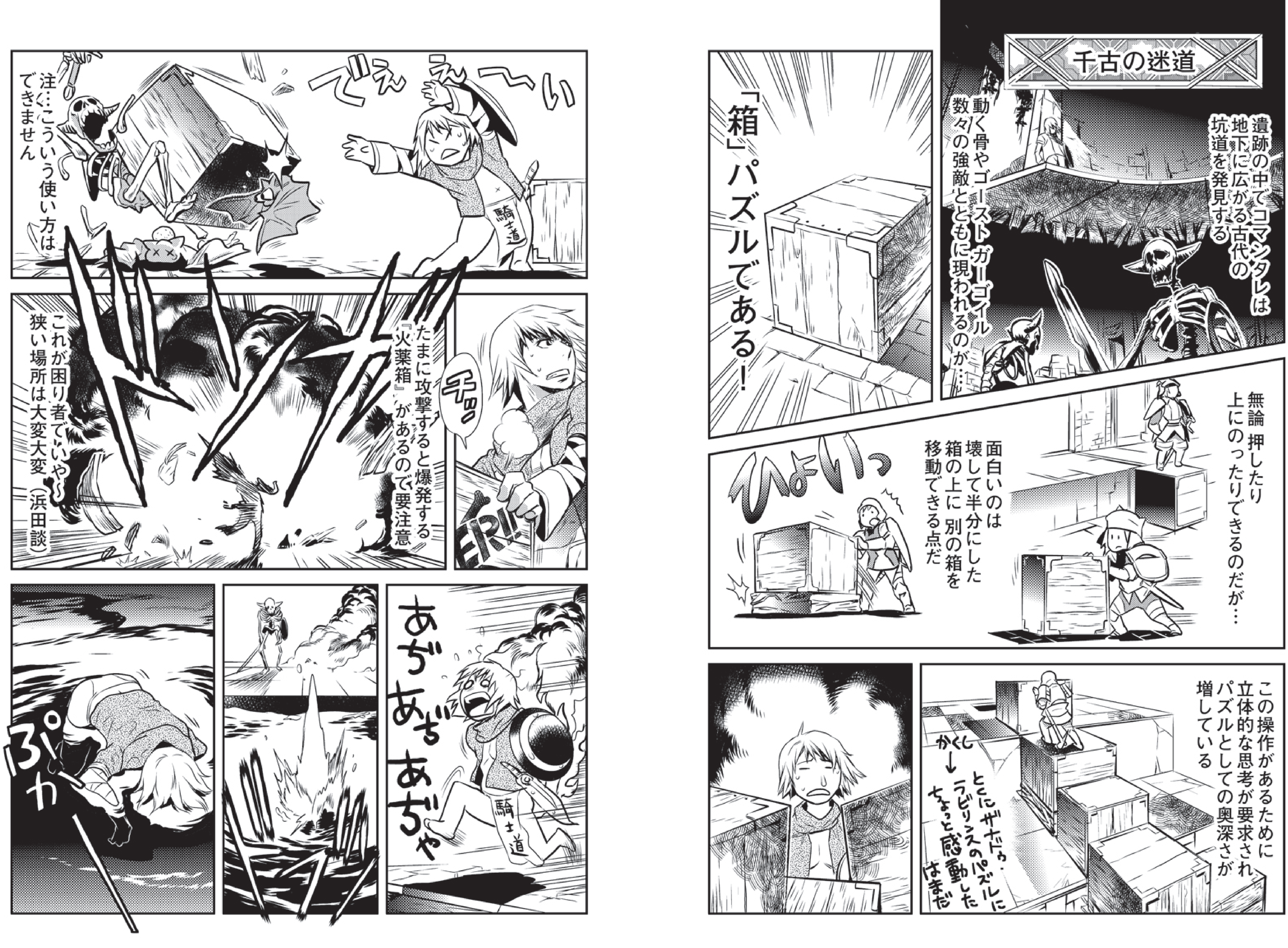
ウムスク〜〜〜〜!!!
(モンゴル相撲の水車落とし)
突如現われた謎の騎士!
コマンタレは彼の技によって再起不能になってしまうのです
…あっ!コマンタレ!
はっ
よかった気が付かれたようですね
あなたの体は瀕死でしたのでちょちょいと降霊術をほどこしました
ハーレックの女祭司
リーゼ
コマンタレは今ゾンビなんだよかっこいいね!


ですがこのままでは
遅かれ早かれ
彼は死んでしまいます
かりそめの生を
確実なものに
するならば…
求めなさい
霧に隠された
城に眠る
伝説の秘宝を！
かつてザナドゥには
魔王ガルシスと
呼ばれる悪魔が
君臨していました
魔王のために 予の民は
塗炭の苦しみを味わいました
家庭は不和になって
離婚も続発…
ご近所のトラブルも増加し
ゴミも前の晩に（以下省略）
…その魔王を地獄に突き帰した
者たちの手にしたという伝説の秘宝…
それがドラゴンスレイヤー!!


ででおったな
ファルコム界最強の
剣…
ヒューマンパワー
インマイソ〜ウル
ドラゴン
スレイヤー…
そのドラゴン
なんちゃらがあると
彼はどうなるの
うきうきわくわくして
思わず飛び上がって
ヤッターって気分に
なるでしょう…
ヤッター
それが
コマンタレが
それがあれば
パァアア…
笑顔を
取り戻すかも
しれない…！
こりゃあ
あの城の調査を
急ピッチで
進めなきゃ！
★ポイントその3
調査するのは
シャルではなく自分
しかも
なにか
ついてる

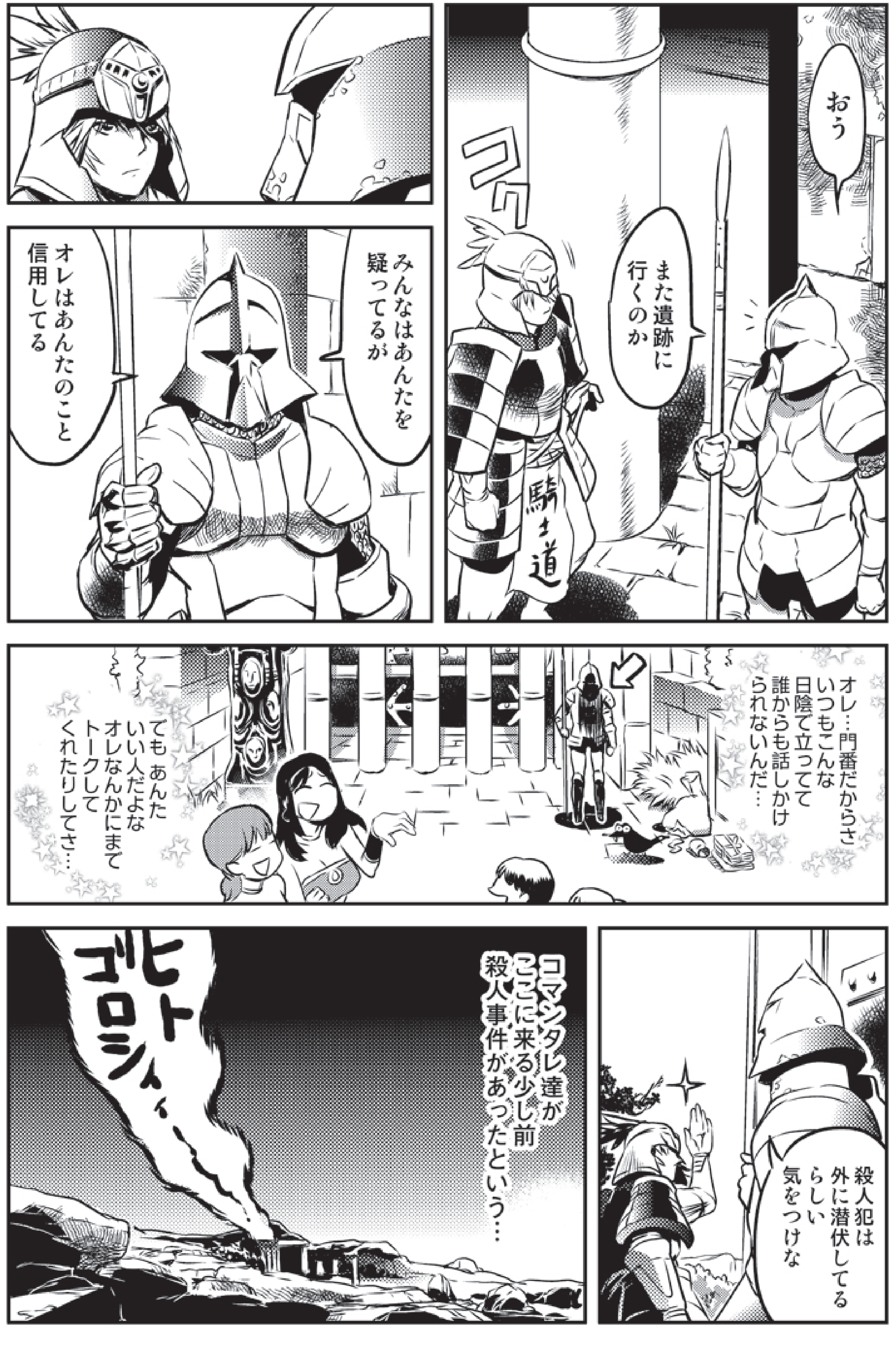

不思議な森のなかで騎士コマンタレは
クローヴァー遺跡
これまた不思議な女トレジャーハンターに出会うのです
なんだその格好? あんた今話題の人殺しか?
騎士道
まあいいか 掘り出し物買って買って
アニエス
謎の女 行く先々にいて ちょっとミステリアス


あんた ダンジョンの中で鍵がなくなって困ったことないか?
道具やのしょぼいメガネから買うのはうんざりだろう?
★ポイント その4 このゲームは鍵の確保がキモである
そこでこのドロボーさんご用達のピッキングマシン! これを×××××に×××××してくるっと××××××
いりません
けんえつ
買わんの? じゃあこっちの「骨を削って鍵作るナイフ」なら買う?
寡黙なやつだ… 騎士か…
★ポイント その5 この世界では騎士とは変人のことらしい
騎士道

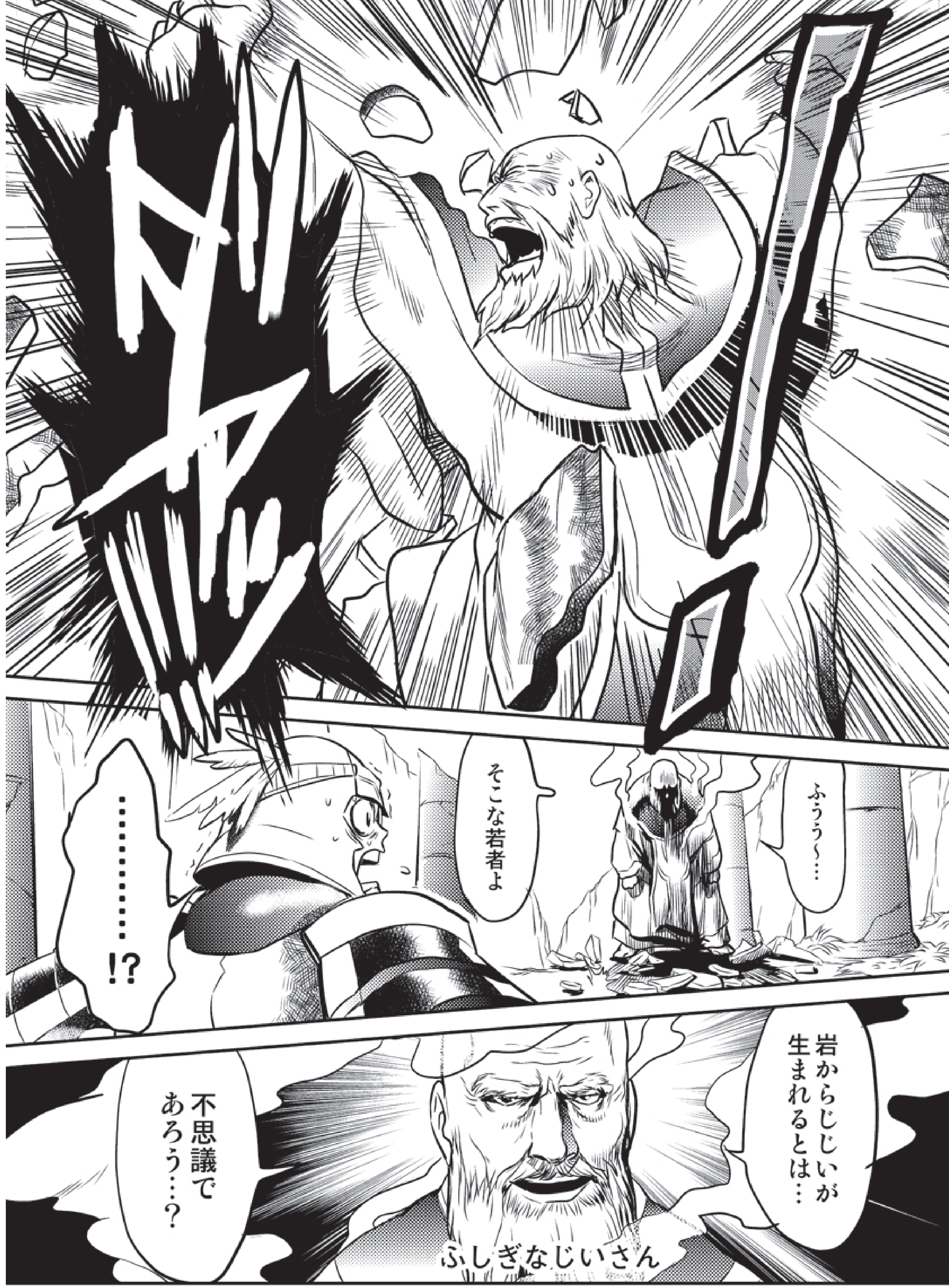

千古の迷道
遺跡の中でコマンタレは地下に広がる古代の坑道を発見する
動く骨やゴーストガーゴイル数々の強敵とともに現われるのが…
「箱」パズルである！
無論 押したり上にのったりできるのだが…
面白いのは壊して半分にした箱の上に 別の箱を移動できる点だ
ひょいっ
この操作があるために立体的な思考が要求されパズルとしての奥深さが増している
かくし
とくにザナドゥ・ラビリンスのパズルにちょっと感動したはまだ
でぇぇ〜〜い
騎士道
注…こういう使い方はできません
チッ
ER!!
たまに攻撃すると爆発する『火薬箱』があるので要注意
これが困り者でいや〜狭い場所は大変大変（浜田談）
あぢあぢあぢゃ
騎士道
ぷか


水の中に入ったら割とすぐ窒息する
ザザ
また失敗したのか…
潮の流れのためか 失敗すると街の船着場に流れ着く自然の大いなるシステム
ザザ ザザ…
ちなみに地上で死んだとしても船着場に流れ着くのは
えっほ
えっほ
そりゃ
たぶん こうなのではないか（笑）


ガチャ
おかえりー なんか見つかった？
★ポイント その6 だいたい宿に帰るたびに装備が変わってる
騎士道
おかえ…
しゅき
騎士道
ガッチャコ
ガッチャコ
あの人いつも重装備で宿屋行き来して…なんか不気味よね
やっぱりあいつ人殺し犯なんじゃないのか…？
ガチャコ


おう
コク
また遺跡に行くのか
騎士道
みんなはあんたを疑ってるが
オレはあんたのこと信用してる
オレ…門番だからさ いつもこんな日陰で立ってて誰からも話しかけられないんだ…
でもあんたいい人だよなオレなんかにまでトークしてくれたりしてさ…
殺人犯は外に潜伏してるらしい気をつけな
コマンタレ達がここに来る少し前殺人事件があったという…
ヒトゴロシィ～


悲しいのは
コマンタレも一度殺されかけたのに誰もいたわってくれないことだ
いいんスけどね
生きてるし
ブツブツ
ブツブツ
あん？ あんたか 今そこで超リアルな石像見つけたんだけどー
よく見たらハゲたじいさまなんで こりゃ売り物にならんと…
？


ふうう～…
そこな若者よ
……!?
岩からじじいが生まれるとは…
不思議であろう…?
ふしぎなじいさん


…わしはな…
星を見るのが好きなロマンティックじじいじゃ…
時に若者よ愚老の見たところ
おぬしもまた不思議な出来事に巻き込まれてゆくさだめ…
さようなら
星を見るのは好きかの…んふふふふっ
ティオバルト老
おお貴公も壮健かドヴォルザーク
!…私の古代ザナドゥ奥義をくらったはず…しぶといな
彼もまた星宿のさだめを負うた哀しき骨肉

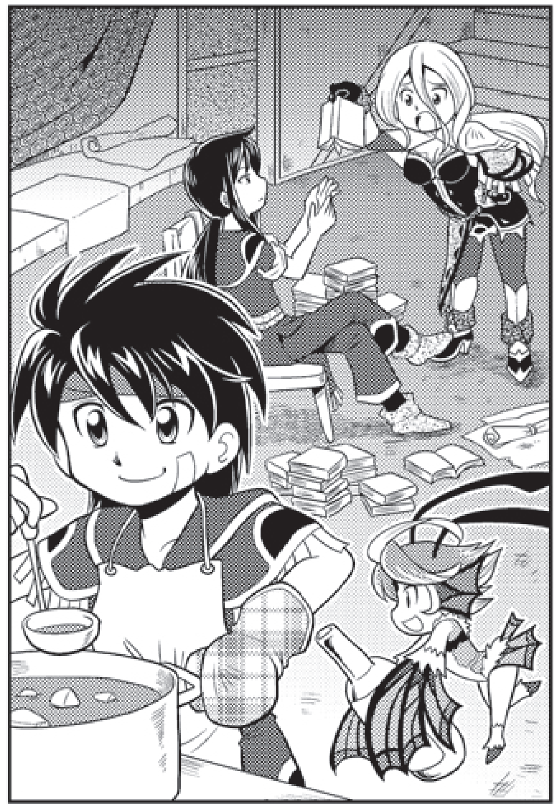


見よ あのフンドシ
恐らく彼はこの時代
最後の騎士となろうよ
ハッ！
私は認めませんぞ
なりは古風なるも
奴の腰はまだ白い
血塗られた
私のものとは
違う…！
運命の奔流に流されし
現代によみがえる
最後の騎士コマンタレ…
霧に隠れた城の謎を解く
彼らを待ち受けるもの…
それは果たして何か…!?
…とりあえず
今日の彼は
どこじゃここ〜
森から出られず
困っている

Fin



FB ファルコムBOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画：楽時たらひ 脚本：田沢大典
『空の軌跡』が始まる――
もうひとつの
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：893円(税込)
ISBN:978-489610-224-6
『英雄伝説 空の軌跡』の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの『空の軌跡』の物語が始まる！
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp



みんな集まれ！ファルコム学園

新久保だいすけ

だいきらい



過去の異名



お姉さんの本性



よりごのみ



クズたるゆえん



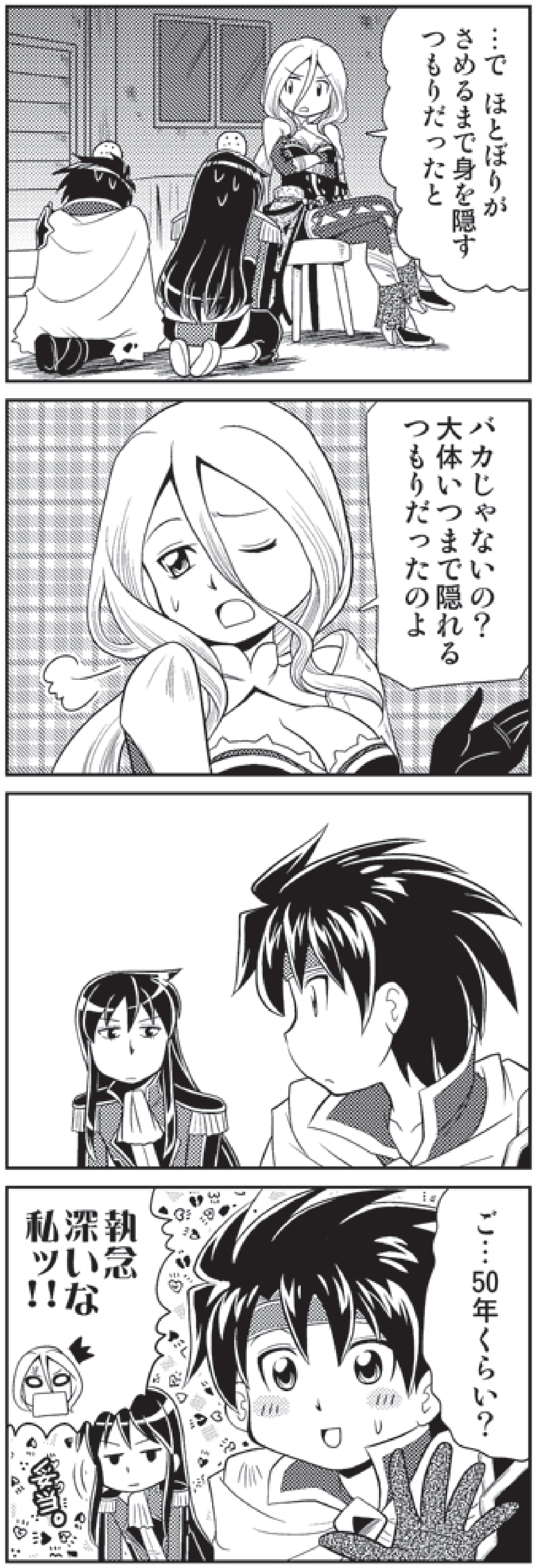
アリオスの結婚論



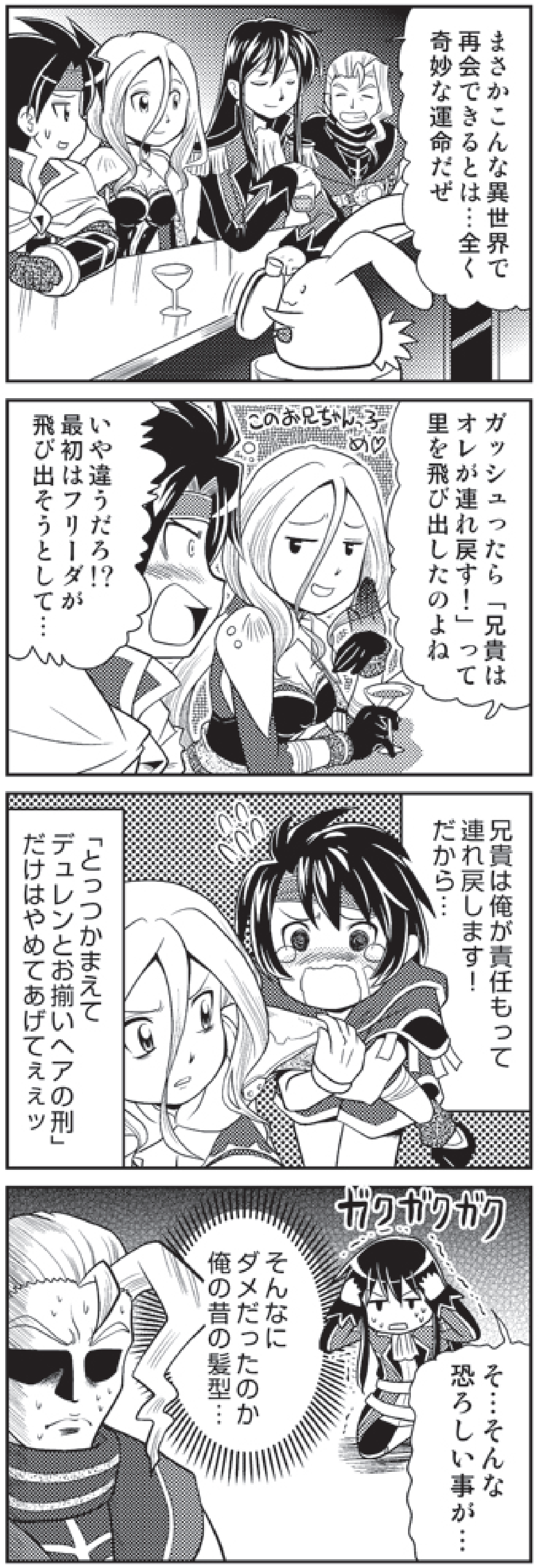
愛の粛清



冷却期間



去りし日の真相



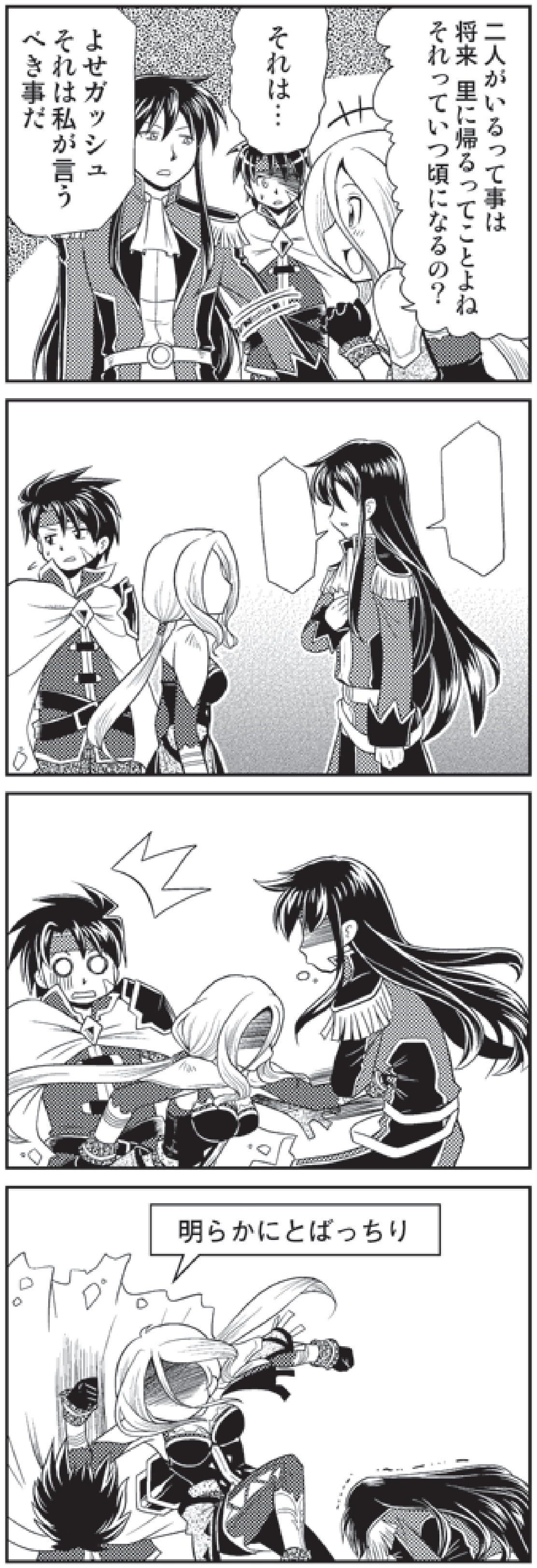
ドサクサ



拒否権



来たるべき日の真理



本当のバカ



先輩と後輩



親愛の証



創業者の加藤が
「いつまでもうちだけが、このままだと思うなよ」
と言ったのを覚えています。 ――――近藤季洋

FB ファルコムBOOKS



『月刊Falcom magazine』誌上に掲載されたロングインタビューを完全収録。社長・近藤季洋や日本ファルコムのゲームミュージックを演奏するjdkバンドのボーカル・小寺可南子など、ここでしか読めないファルコムの『今』が満載！

- 日本ファルコム代表取締役社長：近藤季洋
- OVA版『英雄伝説 空の軌跡』アニメーション監督・演出家：橘正紀
- OVA版『英雄伝説 空の軌跡』脚本家：上江洲誠
- ファルコムjdkバンド ボーカル：小寺可南子　ほか

日本ファルコムの『今』と『これから』がこの1冊に！



Falcom Long Interview
ファルコム ロングインタビュー

全国書店にて大好評発売中!!

価格：1,155円（税込）

ISBN:978-4-89610-232-1

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル

フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

FB ファルコムBOOKS

目指せ！ファルコム一番星!!

開校御礼！

何がどうしてこうなった!?『月刊Falcommagazine』でお馴染み、日本ファルコムの歴代人気キャラクターたちが繰り広げるドタバタ四コマコミックが満を辞して登場。新久保だいすけが描くトンデモな学園生活がスタート！







みんな集まれ！
ファルコム学園①
著者：新久保だいすけ

価格：893円（税込）

ISBN:978-489610-245-1

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル

フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

人生半キャラずらし



jdkバンドのドラマー・オカジがファルコムと音楽と人生について熱く語ります！

「小寺可南子ファルコムソングスの歌い方DVDビデオ」

「なんだか、変なものが出来てしまった。」

あの作品を作り終え、チェック用のプルーフ版を見た後にボソっと呟いてしまった独り言である。

このDVD作品は、かなり〝ちゃんとした〟歌唱教則ビデオである。ところが、何かがオカシイ。何がオカシイのかって、まずは小寺可南子だ。あまりにも綺麗に、そしてカッコよく撮れているjdkTVなどでお馴染みな、バラエティー枠全開のいつもの大阪のオバちゃんとはワケが違うのだ。……もちろん、監督である僕がそういう風に仕向けたワケなんだが、いくらなんでもカッコよすぎるのだ。

でも実際、小寺可南子は本当に凄いヴォーカリストである。

歌のピッチやリズムの修正が当たり前の昨今、今回のDVDに関して言えば、一切ノーエディット。もちろん、多少のコンプやEQ、リミッターなどで音にツヤは出しているが、言ってしまえばそれだけだ。しかも、仮にも簡単とは言えない今回の収録楽曲を、1〜2テイクで決めている。

僕も実際、結構な人数のヴォーカリストと仕事をしてきたけども、こんな事ができてしまう人なんて滅多に出会えない。小寺可南子に桁ハズレの実力がある事を証明していると思う。

そして、オープニング、インタビュー、PV風に撮ったエンディングも素晴らしいデキだ。

まさかここまでバッチリ決まるとは、正直、想像以上だった。今回も諸々一手に引き受けてくれた「ダルクファクト（50）」が、渾身の撮影技術と編集技術を遺憾無く発揮してくれたお陰である。







実際、今回のインタビューパートやエンディングに関して言えば、台本無し、カット割無し、ロケハン無し。すべては僕の頭の中にしかないという、超過酷な労働条件だ。（……スミマセン）

彼は、僕の無鉄砲な制作プランにも文句ひとつ言わず、想像以上のものを仕上げてくれた。しかも、オープニング映像なんて「いつ撮ったの⁉」って感じだ。オープニングに関して僕は本当に酷くて「まあ、ちょっと素材撮っておいてテロップとナレーション入れればOKでしょ」とか言ってたわけだ。正直、あんな雰囲気のある素敵なオープニングが完成するとは夢にも思っていなかった。ダルクファクト（50）恐るべし。人生の大半をあの25階建ての塔で過ごしているだけの事はある。

彼とは正直、中学時代からの腐れ縁なのだが、ここに来て、こんな風にファルコムの仕事を一緒にする仲になるとは思ってもいなかった。つくづく人生って何が起こるか分からない。本当に彼には感謝しかないのである。

でも実は此処からがこの作品の真骨頂である。

本編再生中に、ポチっと再生機器の音声切り替えボタンを押してみて頂きたい。副音声にとんでもない仕掛けがしてあるのだ。音声を切り替えた瞬間に、今までのシリアスな世界観は瓦解する。長年ファルコム音楽の一翼を担ってきた大人物、マクガイアジンドー伯こと、神藤由東大氏の登場である。

神藤氏の面白さと言えば、jdkTVや公認OFF会「まぁでもjdkなんで」でもお馴染みだ。

副音声に収録されているオーディオコメンタリーは、氏のあまりにユルいトーク、また、時に鋭いツッコミ、そしてファルコムファン垂涎のレアな裏話などで彩られているのだ。何故、小寺可南子のマジメな歌唱レクチャー中に、



岡島俊治（Okaji）

1979年6月9日生まれ
ドラマー/パーカッショニスト/作曲、編曲家/プロデューサー
洗足学園短期大学器楽科打楽器専攻卒業。
2000年、ロックバンド『HeadPhonesPresident』のドラマーとしてデビュー。
2005年、同バンド脱退後はフリーミュージシャンとしての活動を開始。様々なアーティストのサポート、レコーディング、プロデュース等を行う。
2008年より『ファルコムjdkバンド』に参加。
主な共演歴：jdk BAND、Sixh.Opera、HeavensDust、野宮真貴、植村花菜、CORE OF SOUL、DENIAL、安藤禎央、清田愛未、中村幸代、一純悠人、momokomotion、越尾さくら…etc



MSXの話をそこまで熱く語るのか。もうワケがわからない。最高である。僕の人選に狂いは無かった。

そんなわけで、この作品は、本編、特典映像、副音声なども併せて見れば、軽く2時間以上は楽しめるボリュームだ。なかなかのボリュームだ。小寺可南子ファンの方はもちろん、もしこのコラムを見て、この作品がちょっと気になってしまったファルコムファンのアナタにも是非とも見て頂きたいと思う。この多重スクロール……いや多重構造のちょっと風変わりなDVDは、きっとアナタの琴線にも触れる何かがあると思う。いや、あるに違いない。

断言しよう。「面白いよ」と。

この場を借りて、この作品に関わってくれたすべての人に感謝の意を表したいと思います。

そしてなにより、いつか映像作品を作ってみたいと思っていた僕に、この作品を作るチャンスをくれたファルコムに感謝。

創らせてくれて、ありがとうございました。

―2013年3月末日
岡島俊治　拝



▶PROFILE



日本ファルコムのゲームソングを奏でる専属バンド"jdkBAND"のボーカル。webラジオ「ファルコムラジオ"めんどくさいです…でもがんばります"」では声優水橋かおりさんと共にパーソナリティをつとめる。その他CMソング、ジングルなど活動は多岐に渡る。
twitter @cana_ko_tera

コテ放題

コテカナことjdkBANDボーカル小寺可南子がゲームと共に、好き放題な日々のことを描くコラム!!

第3回　『零えぼ』編、ついに完結……？

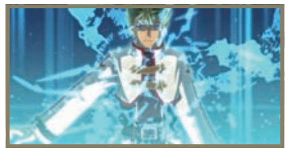


▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

英雄伝説 空の軌跡 the 3rd：改 HD EDITION

『閃の軌跡』の原点がここに!





「軌跡」シリーズ第３弾、「空の軌跡ＳＣ」の半年後を描いた後日譚がＰＳ３で発売決定。シリーズ最新作『閃の軌跡』の舞台となるエレボニア帝国のキャラクターやエピソードも登場する本作をプレイすれば、『閃』がさらに深く楽しめること間違いなしだ。全49曲が収録されたオリジナルサウンドトラックなどのEXTRAコンテンツも必見。6月27日発売。3990円(税込)。

空の軌跡ざんまい

超ロングセラー作品の軌跡がここに!

「軌跡」シリーズ第１～３弾、圧倒的ロングセラーのＲＰＧ『空の軌跡』から特に人気の高い楽曲をセレクト、全曲を新たにアレンジしたアルバムが登場！　初の試みとして「Cry for me, cry for you」をブラスバンドで生演奏するなどファンにはたまらない音源が全９曲収録されている。約150曲の中から選ばれた名曲を堪能しよう。４月９日発売。2100円（税込）。



『ザナドゥ・ネクスト』『ZWEIⅡPlus』 Windows8対応版

鮮やかな世界を高画質で冒険!


ザナドゥネクスト


『ZWEIⅡPlus』

1985年に発売され、多くのＰＣゲームファンをとりこにしたARPG『ザナドゥ』の最新作と２人の主人公が織り成すARPGがWindows8対応バージョンで発売される。『ザナドゥ・ネクスト』は細部まで造りこまれた世界観を、『ZWEIⅡPlus』は魅力的なキャラクターと独自のシステムを最高画質で楽しもう。５月７日発売。各3990円（税込）。

ファルコムjdkバンドディーバ 小寺可南子シングス

歌い方レクチャーで君もディーバに?

jdkバンドのボーカル・小寺可南子が歌うボーカル曲集「ファルコムjdkバンドディーバ 小寺可南子シングス vol.1&2」のカラオケを完全収録したＣＤ、さらにコテチカナ本人が映像で歌い方をレクチャーするＤＶＤが発売される。また、２つがセットになったお得な特別版も。３月29日同日発売。詳細はファルコム通販へ。（http://www.falcom.co.jp/mailorder/index.html）





2011年10月から好評配信中のWEBラジオ『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏をこっそりお届け♪

ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります
■**配信日**　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■**メインパーソナリティ**　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■**公式ホームページ**　http://www.falcom-radio.com/

第72回-第73回　皆川純子（『零の軌跡』ワジ・ヘミスフィア役）

72,73回のゲストはワジ役の皆川純子さん。ライブイベントを間近に控えていたということもあり？　いつも以上にイケメン度がアップしていて、コテさんもしおりんもメロメロになりっぱなしの収録となった。「出発！特務しれん課」のコーナーでは、2回目となる『零えぼ』のクイズ企画が行われ、本誌で連載している「コテ放題」ではなかなか『零えぼ』の本編を進めることができずにいるコテさんが意外な結果を残すことに!?

▶第72回-第73回の舞台裏◀

今回のコテガキにも描かれているように、番組最後にゲストの方に行なってもらっている、今回の提供クレジット後のひと言はコテさんたちのお願いしたセリフになっている。このセリフ作成を急きょ振られたコテさんは、クイズの時以上に時間を使い、セリフを考えていたのだ！

第74回-第75回　西原久美子（『空の軌跡』レン役）

74回、75回のゲストは、レン役の西原久美子さんが登場。二度目の登場となる今回は『零えぼ』発売後ということで、収録時のエピソードを中心にトークが繰り広げられた。そのトークの中には、西原さん、水橋さんのレンへの愛が常に感じられる内容となっていた「出発！特務しれん課」のコーナーでは、ガチくん、しおりんが自分で考えたオリジナルコンビクラフトを披露。74回終了後に「もっと必殺技っぽく！」と厳しい指導を受けて迎えた75回はどうなったのか……は聞いてのお楽しみ。

▶第74回-第75回の舞台裏◀

毎回豪華な差し入れが届くファルコムラジオだが、今回はなんと焼きそば（3種類）とお好み焼きという、「もうご飯じゃん！」とツッコミが入るラインナップ。長時間の収録で体力を使うだけに、キャスト、スタッフはあっという間に食べきってしまい、写真なしの結果に。







今月のコテガキ

毎週更新とともに発表される、小寺さん直筆の「コテガキ」を少しだけご紹介！

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



①　２名様

❷月刊閃の軌跡
マガジン
vol.1&2

『閃の軌跡』の最新情報をお届けするフリーペーパー。全国ゲームショップで配布中の２冊をセットでプレゼント！



②　１名様

❷零の軌跡Evolution クリアファイル

キャラアニ購入特典で配布されたクリアファイル。ティオとキーアが草陰から覗く先には……？

❷英雄伝説
空の軌跡
コミックス⑤

クライマックスへと突き進むエステルたちの物語がここに！
次巻に付属予定のねんどろティータのお知らせにも注目。



②　１名様

プレゼントの応募方法

こちらのアンケートの回答を下記のアドレスまでメールにてお送りください。
プレゼントの当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

●下記のメールアドレスをご記入ください。
●お名前（ペンネーム可）をご記入ください。
●右記の記事一覧から、今月号で一番面白かった・つまらなかった記事をご記入ください。
●ご意見・ご感想などをご自由にご記入ください。
●希望するプレゼントの番号をご記入ください。

宛先：
件名：vol.26プレゼント係
○○○○○○○○○○
◆
面白い：
つまらない：
◆
○○○○○○○○○○
◆
1

●「vol.26プレゼント係」とご記入ください。

【記事一覧】

1：英雄伝説 閃の軌跡 潜入レポート
2：『ザナドゥネクスト』
3：『みんな集まれ！ファルコム学園』
4：英雄伝説 空の軌跡
リベール王国スナップショット
5：jdkバンドドラマー・オカジの
人生半キャラずらし
6：ティオのファルコムラジオ
めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏
7：jdkバンドボーカル・コテカナのコテ放題♥
8：FalcomFanArtCollection
9：ファルコムニュース

宛先はこちら➡ falmaga@field-y.co.jp　応募締め切り　4月26日

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためのみに利用し、その他の目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後３ヶ月を越えて保有することはありません。

Falcom FanArt Collection

数々の名作で多くのファンを生み出してきた日本ファルコム。
FFCでは、そんなファルコムを愛するイラストレーターの方々のイラストとコメントを毎月お届けします！



白鷺みかん

軌跡シリーズは初めて遊んだファルコム作品であると共に、作品を通して沢山の方と交流させて頂くきっかけとなった思い入れの強い作品です。閃も楽しみにしています。エンジョイ★グノーシス！

『英雄伝説 零の軌跡』(2010)

ロイドの姉・セシルが働く聖ウルスラ医科大学で准教授を務めるヨアヒム。優秀だが勤務中にふらりと釣りに出かけてしまったりと、自由奔放な性格で周囲を困らせている。そんな彼が握る物語の鍵とは……!?



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.26

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 大場恵美子
ライティング	宮崎洋平
デザイン・DTP	さとうだいち
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社